

戦争の傷つき

―被爆者の人生を支えたもの

比治山大学非常勤講師 森田裕司

私は映画が好きで最近「ゴジラ」を鑑賞しました。1945年の終戦間際の物語ですが、とてもよかったので、私と同じアラ還仲間を誘って再度劇場で観たくらいです。

今年は戦後80年に当たります。若い人からすれば遠いことのように感じるかもしれませんが、でもそうでしょうか。なかに敏感な人は近い将来の日本を案じておられるかもしれません。私もそのひとりです。

戦時下は戦地に赴く兵士だけでなく

原爆被害による トラウマの特徴

く、一般市民も巻き込まれます。日本では米軍による空襲、沖縄上陸戦、そして広島と長崎には原爆投下があり、多くの方が犠牲になりました。ここでは原爆被害に焦点を当て、私が関わった共同研究「被爆者の人生を支えたもの」を取り上げます。

その前にまず、精神科医の中澤正

夫氏が挙げた被爆体験の心理的影響

被爆体験による心理的影響(中澤, 2007)

- ①麻痺 見ても感じない、記憶喪失
- ②再体験 「引き戻され体験」
消えた街、死体の群れ、負傷者の群れの
光景、見捨て体験 ←光・音・臭いがきつかけ
- ③回避 思い出さないように 語らない 語れない
- ④自責感 「見捨て感」
- ⑤自分の病に直面・不安
(放射線被害による白血病・癌)
- ⑥肉親の病・死に直面・不安
- ⑦差別・偏見の苦しみ
- ⑧遺伝への不安

をまとめた図をご覧ください。

面接調査の方法

広島市が2008年に被爆者を対

被爆者と 非体験者との違い

象に大規模調査を実施しました。目的は「被爆体験が心身に及ぼした影響」を明らかにすることでした。その面接調査に広島県臨床心理士会のメンバー87名が協力しました。当時の会長の提案で、調査の最後に被爆後の人生を支えたものを捉えるために、一人ひとりに15分「あなたのモットー、座右の銘、大切にしてきたことは？」と尋ねました。そして、被爆者396名、統制群として非体験者116名のデータを、会長を中心に結成した研究プロジェクト6名で分析しました。

被爆者と非体験者ごとに、得られた回答のうち人生を支えたと考えられるキーワードを選んでカード化し、似たものをまとめて分類してそれぞれの内容にふさわしい「小タイトル」を、さらにそれらを分類して「大タイトル」を付けました。

その結果、被爆者の方が非体験者よりもカテゴリー化されたタイトル数が多く、内容も多様だとわかりま

した。つまり、被爆者は人生の様々な苦しい局面を生き延びるために、多様な支えや考え方を必要とし、それらを実行してきたということだと思います。被爆者だけにみられた大・小タイトルは表をじっくりご覧ください。

大・小タイトル(被爆者だけにみられたもの)	
『生活信条』	「前向き」「自分のペースで」 「くよくよしない」「なるべくいいようにしない」 「負けたくない」「今を大切に」
『人間関係』	「和」
『家族』	「家族への役割・責任」「親などの言葉」 「子どもの成長」
『原爆体験の受け止め方』	「考え込まない」「原爆のことを考えない」 「生かされているという気持ち」「運命」
『生きる価値』	「感謝」「奉仕」「平和」

では、なぜこれらのタイトルが被爆者だけにみられたのでしょうか。元の発言に立ち戻ると、詳細に検討し、わかったことは以下の3点です。

1つ目は、大タイトル『生活信条』の小タイトル「前向き」「くよくよしない」「今を大切に」など、また、大タイトル『原爆体験の受け止め方』

の小タイトル「考え込まない」「原爆のことを考えない」から、被爆者の原爆被害への主な対処法は、「過去より今と未来を見て生きる」という姿勢です。これは「回避」とも繋がります。今もフラッシュバックに苦しむ被爆者もおられ、そうせざるを得ない事情もあります。

2つ目は、「和」「家族への役割・責任」「親などの言葉」「子どもの成長」など、「人との繋がり、家族との絆」が被爆者を支えたということ。これは被爆者の多くが大切な人を亡くしたことから理解できます。

3つ目は、被爆者は原爆体験を「運命」「生かされている」と捉え、そこから「感謝」「奉仕」「平和」という「生きる価値」が形成されたということ。皆さんは「感謝」「奉仕」が理不尽に被害に遭った被爆者にだけみられるのを不思議に思うかもしれませんが、被爆者は大切なものを次々と失ったことにより、ごく普通の暮らしや周囲の支えがとて有難いことと実感され、他者にも親切に関わるようになったとわかりました。このように、傷つきや苦し

みを乗り越えることが人間的成長をもたらすことをPTG（心的外傷後成長）といい、最近とくに注目されています。

私が学んだことと継承の問題

この研究を通して、私自身に変化が起きました。まず、「日常の当たり前の有り難さ」です。朝「行きます」と家を出て仲間と仕事をし、帰宅して家族と食卓を囲み、入浴して寝るという当たり前が、実はそうでないと気づきました。そして、限りある人生、毎日の身近な人や風景との遭遇をより大切に感じるようになりました。さらに授業への活用です。喪失と再生を描いた映画を鑑賞後、3つ問います。「主人公が失ったものは？」「支えたものは何か？」「(次が難解)「では、失うことで得たものはあるか？」と。受講生から様々な意見が出され、とても刺激的でした。

現在、被爆者の高齢化と減少に伴う伝承の課題があります。今の私たちは、被爆者に直接お聴きして学ぶことのできる最後の世代です。漫画

家こうの史代氏も、そのような問題意識から作品「夕風の街・桜の国」「この世界の片隅に」を描いたとのこと。また、広島の高校生が被爆者に直接話を聴き、何度も直しながら被爆体験の絵を描く活動もそのひとつです。さらに、私たちの世代もいずれ年を取っていき有限です。当事者からの学びを活かし、それぞれができる範囲のことを実践し、伝えていきたいものです。

「ゴジラ-1.0」を見て

ゴジラは水爆がもたらした悲劇の産物です。主人公は特攻隊員でしたが、無事帰宅すると家族が皆亡くなっていました。「生きて帰って来い」と言っただけに残った罪悪感から危険を伴う仕事に就き、出遭った女性と暮らすものの結婚に踏み切れません。「僕の戦争はまだ終わっていないのです…」仲間とともにゴジラに立ち向かい、苦しみを克服し立ち直る物語です。

●参考文献 被爆者の心の調査プロジェクト(2018)『被爆者の人生を支えたもの—臨床心理士によるインタビューから—』

清水社